



報道提供資料

令和 8 年 7 月 17 日（金）午後 4 時

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136
（公財）国際花と緑の博覧会記念協会

企画事業部長 三谷彰一

企画事業部企画事業課係長 大栗大

<https://www.expo-cosmos.or.jp>

090-6913-1445（7 月 17 日のみ）

06-6915-4513

2026 年（第 33 回）コスモス国際賞の受賞者は ロビン・イアン・マクドナルド・ダンバー博士

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会（会長：御手洗富士夫）は、7 月 17 日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会（委員長：山極壽一）、同選考専門委員会（委員長：横張真）からの報告を受け、オックスフォード大学心理学科名誉教授ロビン・イアン・マクドナルド・ダンバー博士（79 歳）を 2026 年（第 33 回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

人類学・進化心理学・霊長類学等を横断する学際的研究により、「社会脳仮説」を体系化し、「ダンバー数」「時間収支モデル」「言語進化理論」を提唱するなど、人間の社会性の起源と進化を解明し、自然と人間との望ましい関係を考察する新たな道筋を示した。

ダンバー博士は、社会脳仮説を体系化し、「ダンバー数」の提唱などを通じて、人類の社会性や文化の進化を科学的に解明した。さらに、生態学的要因と人類進化との関係を数理モデルにより明らかにするとともに、言語、笑い、宗教、祝祭などが社会的結束の形成に果たす役割を解明した。これらの研究は、人類を自然の一部として捉え直し、自然と人間との望ましい関係や共生のあり方を考える新たな視座を提示した。

なお、授賞式は、本年 10 月 26 日（月）に大阪で開催する予定。



写真は次の URL からダウンロードできます。

<https://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/2026photo.html>

1. 授賞の対象

花と緑に象徴される地球上のすべての生命体の相互関係およびこれらの生命体と地球との相互依存、相互作用に関し、地球的視点からその変化と多様性の中にある関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や業績であって、「自然と人間との共生」という理念の形成発展に特に寄与すると認められるもの。

上記の観点から、以下の点を重視する。

- (1) 分析的、還元的な方法ではなく、包括的、統合的な方法による業績であること。
- (2) 地球的視点にたった業績であること。特定の地域や個別的現象に関するものであっても、普遍性があること。
- (3) 直接的な問題解決型ではなく、長期的な視野をもつ業績であること。

2. 選考の経緯

2026 年 5 月から 6 月までコスモス国際賞選考専門委員会を 3 回開催し、152 件を対象に審査した上、6 月 19 日開催のコスモス国際賞委員会で候補者を決定した。

＜2026 年コスモス国際賞の選考対象＞

2024 年 46 件、2025 年 54 件、2026 年 52 件 合計 152 件 (28 カ国)

＜国別内訳＞

日本(40)、アメリカ(26)、イギリス(18)、カナダ(9)、ドイツ(9)、スロバキア(5)、イタリア(4)、オーストラリア(4)、オーストリア(4)、スウェーデン(4)、ケニア(3)、多国籍(3)、フランス(3)、アルゼンチン(2)、イスラエル(2)、コロンビア(2)、スペイン(2)、中国(2)、アイルランド(1)、インド(1)、エジプト(1)、シエラレオネ(1)、シンガポール(1)、スイス(1)、ベナン(1)、ベルギー(1)、ペルー(1)、マレーシア(1)、南アフリカ(1)、明記なし(1)

※二重国籍はそれぞれカウント

3. その他

(1) 授賞式

令和 8 年 10 月 26 日 (月)、住友生命いずみホール (大阪市中央区) で行う。

(2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞 (4,000 万円) を贈呈する。

添付資料

- ・受賞者の概要
- ・授賞理由
- ・受賞者コメント
- ・その他 (歴代受賞者、コスモス国際賞委員会委員・選考専門委員会委員名簿)

受賞者の概要

氏名 ロビン・イアン・マクドナルド・ダンバー
Robin Ian MacDonald Dunbar

生年月日 1947 年 6 月 28 日 (79 歳)

国籍 イギリス

役職 オックスフォード大学心理学科 名誉教授

学歴

1969 年 オックスフォード大学 学士 (心理学・哲学)

1973 年 ブリストル大学 博士 (心理学)

2007 年 オックスフォード大学 修士 (文学)

主な職歴

1974 - 1977 年 ブリストル大学心理学科博士研究員

1977 - 1982 年 英国科学技術研究会議 (SERC) 上級研究フェロー

1979 年 日本学術振興会 (JSPS) 外国人特別研究員 (京都大学霊長類研究所)

1983 年 ストックホルム大学動物学研究所 助教授

1983 - 1985 年 ケンブリッジ大学動物行動学研究部門 研究員

1985 - 1987 年 リヴァプール大学動物学科 研究フェロー

1987 - 1992 年 ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン人類学科 講師・リーダー

1992 - 1994 年 ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン人類学科 教授

1994 - 1997 年 リヴァプール大学心理学科 教授

1997 - 2003 年 リヴァプール大学生物科学部進化生物学 教授

2003 - 2007 年 リヴァプール大学英国学士院 研究教授

2007 - 2012 年 オックスフォード大学進化人類学 教授

2012 - 2017 年 オックスフォード大学進化心理学 教授

2014 - 2017 年 フィンランド・アールト大学コンピュータサイエンス学科 客員教授

2017 年 - 現在 オックスフォード大学心理学科 名誉教授

主な受賞等

- 1988 年 英国王立人類学研究所フェロー
- 1994 年 英国霊長類学会オスマン・ヒル・メダル受賞
- 1998 年 英国学士院フェロー
- 2012 年 アサルト大学名誉理学博士授与
- 2015 年 王立人類学協会ハクスリー賞
- 2019 年 マインツ博物館ヒューマン・ルーツ賞
- 2021 年 フィンランド科学・文学アカデミー外国人フェロー
- 2022 年 ハンガリー科学アカデミー名誉フェロー

主な著書

- 1995 年 *The Trouble With Science*. Faber & Faber and Harvard University Press
『科学がきらわれる理由』松浦俊輔訳、青土社、1997 年
- 1996 年 *Grooming, Gossip and the Evolution of Language*. Faber & Faber.
『ことばの起源 猿の毛づくろい、人のゴシップ』松浦俊輔、服部清美訳、青土社
1998=2014=2016 年
- 2010 年 *How Many Friends Does One Person Need?: Dunbar's Number and Other Evolutionary Quirks*. Faber & Faber
『友達の数は何人？ ダンバー数とつながりの心理学』藤井留美訳、インターシフト、2011 年；青土社、2025 年
- 2012 年 *The Science of Love and Betrayal*. Faber & Faber and Harvard University Press
『ヒトはなぜ恋に落ちるのか 愛と裏切りの進化心理学』吉嶺英美訳、青土社、2025 年
- 2014 年 *Human Evolution*. Pelican Press and Oxford University Press
『人類進化の謎を解き明かす』鍛原多恵子訳、インターシフト、2016 年
『人類進化 私たちはいかにしてヒトになったか』鍛原多恵子訳、河出書房新社、2025 年
- 2021 年 *Friends: Understanding the Power of our Most Important Relationships*. Little Brown
『なぜ私たちは友だちをつくるのか 進化心理学から考える人類にとって一番重要な関係』吉嶺英美訳、青土社、2021 年
- 2022 年 *How Religion Evolved and Why It Endures*. Pelican Press and Oxford University Press
『宗教の起源 私たちにはなぜ<神>が必要だったのか』小田哲訳、白揚社、2023 年

授賞理由

ロビン・イアン・マクドナルド・ダンバー博士は、人類学・進化心理学・霊長類学、認知科学を横断する学際的研究により人の社会と社会性を考察し、人類が進むべき道筋において、我々は何者かという根源的な課題への科学的アプローチをおこなった。その基盤となる業績が「社会脳仮説 (Social Brain Hypothesis)」の体系化である。霊長類、とくにヒトの大きな脳新皮質は、複雑な社会関係を維持するために進化したとされ、博士は霊長類の各種について脳新皮質と旧皮質の比率を群れサイズと比較し、群れサイズが大きい種ほど脳新皮質の比率が高いことを示した。この研究から、現代人の脳サイズを基に個人の親しい家族や友人の数には一定の上限があるという、いわゆる「ダンバー数」を提唱し、これは私たちの社会構造や社会行動への新たな視点を提供するものとして、学术界を越えて広く一般社会にも流布するところとなっている。

ダンバー博士はこの社会脳仮説を、1日の活動時間配分と結びつけて考察することで、ヒトの心理的・社会的特性の進化要因を解明した。すなわち、ある生物種が生存するために不可欠な、睡眠を含む休息、栄養獲得のための採食、社会維持のための社交という、三つの要素にそれぞれ費やす時間を1日の中でどのように割り振るかに注目し、当該の種の生活形態や生理学的特性、社会構造などとの関係を推測し、そのモデルを古人類に適用して、人類が新しいニッチに進出してきた過程を科学的に推測し復元した。これにより、体毛の減少による採食移動の効率化、笑いの獲得による社会維持の効率化、火を使った調理による採食の効率化などが人類の進化過程でクリティカルな役割を果たしたことを定量的に明らかにした。

古人類の採食生態の変化や体毛の減少などの諸特性には、生息地の気温、降水量、植生、食物の分布状態といった生態学的な諸要因が複雑に関係している。博士らの研究グループは、これらの生態学的諸要因の変化と人類社会の諸特性の変化との関係を定量的に解析する数理モデルを開発し、人類の進化過程を地球生態系の動態の中で科学的に解釈することに成功した。

さらに、博士は、大きな脳を獲得した人類が、言語の進化にも重要な貢献を行い、ヒト言語は大規模社会において社会的結束を維持するために進化したと論じた他、笑いや飲酒を伴う饗宴、宗教や祝祭なども、これに寄与し、重要であることを詳細な分析により明らかにした。

今や人類が環境や生態系へもたらしてきた影響は、「人新世」という概念が提唱されるほどに、深刻かつ不可逆的な段階に達している。このような状況において、未来における自然と人間との望ましい関係性を考察する上では、現在の人類が環境や生態系に与えている影響を捉えるばかりでなく、そもそも我々人類はいかにして生まれ、進化し、文化や文明を形成してきた存在であるのかという本質的な問いを改めて捉え直す必要がある。こうした存在論的視点を欠いたままでは、人と自然の関係を未来に向けて構想する際の基盤が脆弱なものとなり、その全体像を適切に展望することはできない。

人間は自然の一部でありながら、科学技術や経済活動を通じて自然環境を変えてしまう存在でもある。そのため、人間の行動や価値観の本質を知り、社会のあり方を見つめ直す博士の人類進化史研究は、今後、人新世概念との関係において学術的に堅固な足場を提供するものである。これは、生命体と地球との相互作用に関し、統合的視点からその変化と多様性の本質を解明するものとして、コスモス国際賞の授賞にふさわしいと評価した。

受賞者コメント

2026年度コスモス国際賞を頂き、大変光栄に思います。賞委員会、選考委員会の皆様に心より感謝申し上げます。

今回の受賞は、人間やその他の動物を、それらが進化してきた環境において研究してきた長年のキャリアの集大成となるものです。このようなキャリアパスを、当初から目指していたわけではありませんが、人生にはよくあることで、様々な出来事が積み重なった結果、今に至っています。私はイギリスで生まれましたが、20代になるまでの子供時代を、最初は西オーストラリアで、その後、東アフリカで過ごしました。野生生物が非常に多く生息する環境で育ち、アフリカ、アジア、ヨーロッパといった様々な文化を背景に持つ人々と日々密接に触れあう中で、私たちが暮らす世界の驚くべき多様性に対して畏敬の念を抱くようになりました。こうして、動物種や人間の文化、言語の起源や歴史に対して、生涯にわたる強い関心が培われたのです。とは言え、私の知的な興味は最初は人文科学、つまり哲学、歴史、詩、文学にありました。そこで、哲学を学ぶために大学に進学しました。オックスフォード大学では学部生でしたので、哲学を単体で専攻することができず、心理学を第二専攻として選択しました。幸いにも、このことがきっかけで、動物行動研究を媒介として科学に触れる機会が生まれ、学生時代には東アフリカと西アフリカでサルに関するフィールドワークを行いました。最終的には、エチオピアでの霊長類の行動生態学に関する現地調査をもとに、博士号（PhD）を取得するに至りました。ここで初めて日本の霊長類学者と出会いました。この出会いにより、日本学術振興会の奨学金を頂くことができ、のちに京都大学の霊長類研究所に客員研究員として数ヶ月在籍することになりました。

私の研究は、常に社会的な進化、特に霊長類と人間の社会的進化を中心に進めてきました。動物と人間は、社会的な集団の中で、避け難い多くのストレスがありながらも、どのようにして調和を保って暮らしているのか？彼らはどのようにしてその環境や他の種と調和して（時には調和せずに）暮らしているのか？種の保存と生息地の保全は、特に気候変動に直面している今、私の重要な研究テーマです。これらの問題を探求する中で、私は常に意識的に学際的なアプローチをとってきました。私のプロジェクトは、生態学、心理学、神経科学、数学、物理学、コンピュータサイエンス、考古学、人類学、歴史学、音楽学、さらには文学の学者・研究者らとの緊密な協力関係に助けられてきました。

人間、霊長類、有蹄類、鳥類を対象としたこの研究から、4つの主要な概念（社会脳仮説、ダンバー数、時間という非常に重要な生態学的制約、ゴシップや社会的繋がり、すなわち言語進化の理論）が生まれ、そうした概念を行き来する中で、コミュニティではいかにして調和を保って暮らすのかに焦点を合わせた社会進化の新たな理解を確立しました。これはコスモス国際賞の趣旨である中心的テーマの一つです。

コスモス国際賞歴代受賞者（肩書きは受賞時）

「コスモス国際賞」は、「自然と人間との共生」という理念の発展に貢献し、「地球生命学」とも呼ぶべき、地球的視点における生命相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や学術活動を顕彰するために設けられた国際賞です。

1993 年（第1回）受賞者

ギリアン・プランズ卿【イギリス】 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

1994 年（第2回）受賞者

ジャック・フランソワ・バロー博士（物故者）【フランス】 パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

1995 年（第3回）受賞者

吉良 龍夫 博士（物故者）【日本】 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

1996 年（第4回）受賞者

ジョージ・ビールズ・シャラー博士【アメリカ】 野生生物保護協会科学部長

40年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

1997 年（第5回）受賞者

リチャード・ドーキンス博士【イギリス】 オックスフォード大学教授

1976年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

1998 年（第6回）受賞者

ジャレド・メイスン・ダイヤモンド博士【アメリカ】 カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

1999 年（第7回）受賞者

呉 征鎰（ウー・チェン・イー）博士（物故者）【中国】

中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

2000 年（第8回）受賞者

デービッド・アッテンボロー卿【イギリス】 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

2001 年（第 9 回）受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授【アメリカ】 マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

2002 年（第 10 回）受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所【エクアドル】

1964 年設立の国際的 NGO・NPO 組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

2003 年（第 11 回）受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士（物故者）【アメリカ】 ミズーリ植物園園長

米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

2004 年（第 12 回）受賞者

フーリャ・カラビアス・リジョ教授【メキシコ】 メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

2005 年（第 13 回）受賞者

ダニエル・ポーリー博士【カナダ】

ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

2006 年（第 14 回）受賞者

ラマン・スクマール博士【インド】 インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

2007 年（第 15 回）受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士（物故者）【イギリス】

ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行なった。

2008 年（第 16 回）受賞者

ファン・グエン・ホン博士【ベトナム】 ハノイ教育大学名誉教授

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

2009 年（第 17 回）受賞者

グレッチェン・カーラ・デイリー博士【アメリカ】 スタンフォード大学教授

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

2010 年（第 18 回）受賞者

エステラ・ベルゲレ・レオポルド博士（物故者）【アメリカ】 ワシントン大学名誉教授

父アルド・レオポルド氏（1887－1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及するとともに、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

2011 年（第 19 回）受賞者

海洋生物センサス科学推進委員会 事務局：【アメリカ】

海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測するプロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。

2012 年（第 20 回）受賞者

エドワード・オズボーン・ウィルソン博士（物故者）【アメリカ】 ハーバード大学名誉教授

アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動した。

2013 年（第 21 回）受賞者

ロバート・トリート・ペイン博士（物故者）【アメリカ】 ワシントン大学名誉教授

生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。

2014 年（第 22 回）受賞者

フィリップ・デスコラ博士【フランス】 コレージュ・ド・フランス教授

人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アチュアの人々の自然観とそこの自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。

2015 年（第 23 回）受賞者

ヨハン・ロックストローム博士【スウェーデン】 スtockホルム・レジリエンス・センター所長

人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。

2016 年（第 24 回）受賞者

岩槻 邦男博士【日本】 東京大学名誉教授

生物多様性を探求し、伝統的な手法に加えて、分子系統的な手法も取り入れつつ、包括的かつ多面的に植物系統分類学を発展させた。また、系統分類学を含めた多様性生物学による生物の統合的理解の重要性を説き、そのような理解が生物の豊かさや自然との共生を支える重要な原理であることを明らかにした。

2017 年（第 25 回）受賞者

ジェーン・グドール博士（物故者）【イギリス】 ジェーン・グドール・インスティテュート創設者

1960 年から、野生チンパンジーの研究を続け、その全体像を明らかにするとともに、チンパンジーが住む森を保全するための植林活動や環境教育活動を行った。博士が創案した青少年が担い手となる環境教育プログラム「ルーツアンドシューツ」は 99 カ国で約 15 万団体が、その活動を展開している。

2018 年（第 26 回）受賞者

オギュスタン・ベルク博士【フランス】 フランス国立社会科学高等研究院教授

和辻哲郎の著作「風土」から大きな影響を受け、風土概念をさらに拡充、深化、発展させ、「風土学（*mésologie*）」と名づけられる新たな学問領域を切り拓き、自然にも主体性があるという「自然の主体性論」を提唱した。

2019 年（第 27 回）受賞者

スチュアート・L・ピム博士【アメリカ】 デューク大学教授

地球上の生物の食物網の複雑さや種の絶滅速度等についての理論を提唱し、地球規模の生物多様性に関する政策などに大きな影響を与えると共に、生物保全活動を実践する団体を支援する NGO を設立するなど、生態系や生物多様性の保全に対して、科学と実践の両面において多大な功績を収めた。

2021 年（第 28 回）受賞者

ピーター・ベルウッド博士【オーストラリア】 オーストラリア国立大学名誉教授

考古学、言語学、人類生物学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、農耕の起源と初期農耕民の移動・拡散過程を明らかにするとともに、この研究を通して、自然と人間との共生の歴史を統合的な視点から探求した。

2022 年（第 29 回）受賞者

フェリシア・キーシング博士【アメリカ】 バード大学教授

自然生態系の生物多様性と、人獣共通感染症病原体が人間社会へ伝播するリスクとの関係性を、実践的な調査研究によって明らかにし、ポストコロナ時代における自然と人間の共生のあり方に科学的な示唆を与えた。

2023 年（第 30 回）受賞者

クリスティン・シュレイダー＝フレシェット博士【アメリカ】

ノートルダム大学オニール家講座名誉教授

環境問題を考察する際に「環境正義」の概念が重要であることを提唱し、現在の環境問題に対する姿勢に警鐘を鳴らした。博士が積極的に関与してきた定量的リスク評価手法に基づく「環境正義」は、誰もが健全な環境で暮らせる社会の実現を目指す際の不可欠な指針となっている。

2024 年（第 31 回）受賞者

ウィリアム・ジェームズ・サザーランド博士【イギリス】 ケンブリッジ大学動物学科研究部長

「エビデンスに基づいた保全」を提唱し、世界中の膨大な研究論文より情報を集積したウェブサイトを構築する等、生物多様性保全のあり方に革新をもたらした。

2025 年（第 32 回）受賞者

デービッド・アンドリュース・キース博士【オーストラリア】

ニューサウスウェールズ大学生態系科学センター教授

植物生態学的研究を基盤に、地球的視野からの生態系の類型化及び、国際自然保護連合（IUCN）生態系レッドリストの確立に尽力し、その保全方法に大きく貢献した。

2026 年コスモス国際賞 賞委員会委員および顧問

International Cosmos Prize Committee

2026.6 (五十音順)

役職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	山極 壽一 Dr. YAMAGIWA Juichi	人類学、霊長類学 Anthropology, Primateology	総合地球環境学研究所所長 Director General, Research Institute for Humanity and Nature
副委員長 Vice Chairperson	中西 友子 Dr. NAKANISHI Tomoko	放射線植物生理学 Radioplant physiology	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	秋道 智彌 Dr. AKIMICHI Tomoya	生態人類学 Ecological anthropology, Ethno-biology	山梨県立富士山世界遺産センター所長 Director General, Fujisan World Heritage Center
委員 Member	浅島 誠 Dr. ASASHIMA Makoto	発生生物学 Developmental biology	帝京大学特任教授 Research Professor, Teikyo University
委員 Member	池内 了 Dr. IKEUCHI Satoru	天文学 Astronomy	総合研究大学院大学名誉教授 Professor Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies
委員 Member 選考専門委員兼任	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館名誉教授 Professor Emeritus, National Museum of Ethnology
委員 Member	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	西澤 直子 Dr. NISHIZAWA Naoko	植物分子生物学 Plant molecular biology	石川県立大学参与 Counselor, Ishikawa Prefectural University
委員 Member	林 良博 Dr. HAYASHI Yoshihiro	動物資源科学 Animal science and resource	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	村上 哲明 Dr. MURAKAMI Noriaki	植物系統分類学 Plant Phylogeny and Taxonomy	兵庫県立人と自然の博物館館長 Director, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo
委員 Member 選考専門委員会委員長兼任	横張 真 Dr. YOKOHARI Makoto	緑地環境科学 Landscape and environmental science	東京大学総括プロジェクト機構 特任教授 Project Professor, Organization for Interdisciplinary Research Projects The University of Tokyo
委員 Member	鷺谷 いづみ Dr. WASHITANI Izumi	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation ecology	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo

役職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
顧問 Advisor	岩槻 邦男 Dr. IWATSUKI Kunio	植物分類学 Systematic botany	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
顧問 Advisor	尾池 和夫 Dr. OIKE Kazuo	地球科学 Geoscience	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
顧問 Advisor	岸本 忠三 Dr. KISHIMOTO Tadamitsu	免疫学 Immunology	大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任教授 Project Professor, Immunology Frontier Research Center, Osaka University
顧問 Advisor	中村 桂子 Dr. NAKAMURA Keiko	生命科学・生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館名誉館長 Honorary Director, Biohistory Research Hall

2026 年コスモス国際賞 選考専門委員会委員
International Cosmos Prize Screening Committee of Experts

2026. 6 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	横張 真 Dr. YOKOHARI Makoto	緑地環境科学 Landscape and environmental science	東京大学総括プロジェクト機構 特任教授 Project Professor, Organization for Interdisciplinary Research Projects The University of Tokyo
副委員長 Vice Chairperson	佐倉 統 Dr. SAKURA Osamu	科学技術社会論 Science and technology studies	実践女子大学人間社会学部 教授 Professor, Faculty of Human and Social Studies, Jissen Women's University
委員 Member	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館名誉教授 Professor Emeritus, National Museum of Ethnology
委員 Member	上原 麻有子 Dr. UEHARA Mayuko	日本哲学 Japanese philosophy	京都大学大学院文学研究科 教授 Professor, Graduate School of Letters, Kyoto University
委員 Member	沖 大幹 Dr. OKI Taikan	地球水循環システム Global Hydrological System	東京大学大学院工学系研究科 教授 Professor, School of Engineering, The University of Tokyo
委員 Member	亀山 康子 Dr. KAMEYAMA Yasuko	国際関係論 International relations	東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授 Professor, Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo
委員 Member	シュテファン ・ホーテス Dr. Stefan Hotes	景観生態学 Landscape Ecology	中央大学理工学部人間総合理工学科 教授 Professor, Faculty of Science and Engineering, Chuo University
委員 Member	宮下 直 Dr. MIYASHITA Tadashi	生物多様性科学 Science of Biological Diversity	東京大学大学院農学生命科学研究科 名誉教授 Professor Emeritus, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo
委員 Member	湯本 貴和 Dr. YUMOTO Takakazu	植物生態学 Plant Ecology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	横山 潤 Dr. YOKOYAMA Jun	植物分類学 Systematic botany	山形大学理学部 教授 Professor, Faculty of Science, Yamagata University